

マージナル・マン論再考：同化と「アイデンティティ」

大中，一彌 / ONAKA, Kazuya

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

151

(発行年 / Year)

2022-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025973>

〔論文〕

マージナル・マン論再考

— 同化と「アイデンティティ」 —

大中 一彌

ONAKA Kazuya

1. はじめに

この論文の目的は、ロバート・E・パークが提唱したいわゆるマージナル・マン論を再考することにある。パークは、19世紀の後半から20世紀前半に活躍した人物であり、社会学におけるシカゴ学派の代表者のひとりとされている。パークの教え子であるE・ヒューズに従うなら¹、マージナル・マンという言い回しは、パークの評論「人の移住とマージナル・マン」(1928年)をきっかけに用いられるようになった。パークによれば、マージナル・マンとは「互いに完全には浸透しておらず、融合もしていない2つの文化や2つの社会の境目^{マージン}にいる人」を指す²。「2つの世界に属しており、どちらの世界でも多かれ少なかれ異邦人」であるマージナル・マンとしてパークが挙げるのは、例えばヨーロッパのゲッターから、「より自由で、より複雑かつ世界市民的な^{コスモポリタン}」都市生活を求め、合衆国にやってくるユダヤ人移民であり、また主に

- 1 E. C. Hughes, “Social Change and Status Protest: An Essay on the Marginal Man”, *Phylon*, vol. 10, no. 1, 1949, pp.58-65. 以下この論文はHughesと略記する。
- 2 R. E. Park, “Human Migration and the Marginal Man”, *American Journal of Sociology*, vol. 33, no. 6, 1928, p.892. 以下この論文はHMと略記する。

アフリカ出自の人と、いわゆる白人と呼ばれる人の間に生まれた人を指すムラートであり、そして主にアジア出自の人と、いわゆる白人と呼ばれる人の間に生まれた人を意味した欧亜混血者（Eurasian）、さらにはアジアやアフリカにおけるキリスト教への改宗者である。これらの人びとに加え、E・V・ストーンキストの著書『マージナル・マン』（パークが序文を書いている）の表現を用いるなら、マージナル・マンには、ムラートや欧亜混血者のような「人種的ハイブリッド」だけでなく³、ユダヤ教からキリスト教への改宗を経験しつつ、痛烈な社会批判を行なった詩人H・ハイネや⁴、スペイン人の両親をもちスペイン生まれながら、哲学者・作家としてアメリカ合衆国で活躍したサンタヤナのような「文化的ハイブリッド」も含まれる⁵。

2. マージナル・マンをめぐる肯定的な性格づけ

パークのマージナル・マン論のひとつの特徴は、マージナル・マンに、肯定的な性格と否定的な性格がともに付与されている点にある。

肯定的な性格に関し、パークは、ジンメルの異邦人論における特徴づけを参照していた。ジンメルにおいて、異邦人は、「所与のいっさいの地点からの解放」としての放浪と、ある地点への定着という2つの規定の統一とされる。異邦人は、今日訪れてきて明日には去ってしまう放浪者ではなく、「今日訪れて明日もとどまる者」である。しかし、この滞在は最終的な定着ではないし、また滞在先の場所に由来しないような性質を異邦人は帯びている。すなわちジンメルによれば、異邦人は、滞在先の「集団の一面的な傾向にとらわれていない」ため客観

3 E. V. Stonequist, *Marginal Man : A Study in Personality and Culture Conflict*, Russell & Russell, 1961. 以下この著作はStonequist, *MM*と略記する。

4 ハイネへの言及はHM, p.892.

5 サンタヤナへの言及はStonequist, *MM*, p.xvi.

的であり、より自由なしかたで物を考えることができる⁶。

こうしたジンメルによる異邦人の特徴づけを、マージナル・マンをめぐる記述に組み込むにあたり、パークは、「人格の個人化」と「社会の世俗化」という2つの背景を導入している⁷。例えば評論「人の移動とマージナル・マン」において、諸民族の移動や移住、貿易や商業の拡大は、「地域的な紐帯をゆるめ」、「地方的な忠誠心」を「都市の自由」で置き換えるとともに、「部族的な習俗にもとづく神聖な秩序」を「私たちが文明と呼ぶ合理的な組織化」で置き換えるとされている⁸。また、こうした置き換えの過程の全体を、パークは「文明化の過程」と呼んでいるが、パークにあって「文明化の過程」とは、都市を中心とした経済的な分業の発達とともに、人類が「原始時代の人びとをあれほど徹底的に支配していた自然や環境による限界づけからみずからを解放する」過程に他ならない。こうして、マージナル・マンには、迷信を免れ、世俗的で、親族的・地縁的な紐帯からある程度解放された個人という特徴が付与されるわけであるが、マージナル・マンは同時に、文明化の過程の全体を個人の心理というミクロなレベルで研究することを可能にする存在であるともみなされている⁹。

ちなみにパークは、マージナル・マンが「経済的、政治的、文化的」な「帝国主義のひとつの帰結」とであると形容してもいた¹⁰。パークにとって、「帝国主義」という言葉がここでどのような意味の広がりをもつものなのか、詳細に検討することはできないが、古代ギリシアにおける都市国家^{ポリス}の建設以来、文明化の過程に徹底的な破壊や混乱が伴

6 G・ジンメル『社会学』下、居安正訳、白水社、2016年、285-291頁。

7 HM, p.888.

8 HM, p.890.

9 *Ibid.*

10 R. E. Park, *Race and Culture*, The Free Press, 1950, p.376. 以下この著作はR&Cと略記する。

うことは認めながらも、ポリスが、伝統的権威から解放された世論や、自由な思想を産み出す「より啓蒙された社会秩序」であったと見るパークの視点からするならば¹¹、マージナル・マンに付与された、伝統的な紐帯や迷信から解放された世俗的な個人に向かう傾向は、おおむね肯定的な特徴として捉えられていたといえることができる。

3. マージナル・マンをめぐる否定的な性格づけ

文明化の過程に寄せる楽天的な信頼以上に、マージナル・マンをめぐるパークの描写に疑問がさしはさまれてきたのは、おそらく「精神の不安定さ、激しい自己意識、落ち着きのなさ、はけ口のない不快感」といった¹²、心理面で否定的といえるマージナル・マンの性格づけをめぐってであろう。

例えば、M・M・ゴールドバーグは、前出のストーンキストが、その論文でユダヤ系移民は「典型的なマージナル・マンに思える」と述べていることを取り上げ¹³、次のように反論している。すなわち、ヨーロッパから合衆国に移住したユダヤ系移民の第2～第3世代のように、幼少期からサブカルチャー教育を施されるなど、2つの文化の間で育った人間が全員、パークのマージナル・マン論で想定されていたような不安定な心理状態にあるわけではない、というのである。ここでゴールドバーグの論拠となっているのは、人口10万人程度の合衆国の都市におけるユダヤ人の事例だ。これらのユダヤ人は、さまざまなユダヤ系移民組織に属して人生を過ごす、それで心理的に不安定な状態に陥ってはいない。ユダヤ系移民が「典型的なマージナル・マン」と見えたのは、ストーンキストが調査しているのがもっぱら「大都市の

11 HM, p.889.

12 HM, p.891.

13 E. V. Stonequist, “The Problem of the Marginal Man”, *American Journal of Sociology*, vol. 41, no. 1, 1935, p.9.

かなり知力・感受性の鋭い人びとで、最頻値的でない選ばれた集団」だからだと、ゴールドバーグは批判している¹⁴。

また、D・I・ゴロヴェンスキーは、ユダヤ人や外国人が典型とされるマージナル・マンに、人格的・社会的な病理や、高い犯罪率、不健康といった否定的な特徴を結びつける見方を紹介したうえで、統計に基づき、外国人やユダヤ人の犯罪率が高いという事実は観察されないと論駁している。ゴロヴェンスキーはさらに、「コンプレックスや神経症、文化的分裂病」を抱えることになるのは、むしろみずからのエスニックな帰属を否認するユダヤ人だ、という。そして、黒人やカトリック信徒など、他のマイノリティにおいても、「本当にマージナルな人びと」になるのは、みずからの出自を隠したり消し去ろうとしたりする「根なし草の流れ者」だと強調している¹⁵。

4. 「小さな地方都市」対「大都会」という図式の効果

肯定的な性格と否定的な性格の双方がともに付与されている、このマージナル・マンという両義的な表現を、今日再び考えてみるうえでおそらく重要なことは、パーク自身を含め、20世紀前半に活躍した多くの合衆国の社会学者が、暗黙のうちに前提としていた1つの図式が、この表現を下支えしていたことである。

その図式とは、マージナル・マンの否定的な性格づけを批判するゴールドバーグも用いていた、比較的小さな地方都市と、シカゴのように

14 M. M. Goldberg, "A Qualification of the Marginal Man Theory", *American Sociological Review*, vol. 6, no. 1, Feb., 1941, pp.52-58. なおゴールドバーグによる、マージナル・マン概念の批判的検討については、折原浩『危機における人間と学問 マージナル・マンの理論とウェーバー像の変貌』未来社、1969年、67-68頁、に、要を得たまとめがある。

15 D. I. Golovensky, "The Marginal Man Concept: An Analysis and Critique", *Social Forces*, vol. 30, No. 3 (Mar., 1952), pp.333-339.

急激に発展した大都市の対比だ。この時代のシカゴの発展をめぐり、例えば、1930年に、シカゴ大学を訪れていたデュルケーム派の社会学者、M・アルヴァクスが、「シカゴ、民族の実験」という論文を書いている¹⁶。この論文によれば、1860年のシカゴ市の人口は10万8206人であったのに対し、1930年の人口は337万3753人と、70年で31倍に激増した。つづいてアルヴァクスは、1920年の統計において、シカゴ市の人口の63%が、外国人か、両親とも外国籍の人だと述べ、この外国人比率は全米平均の倍だとも指摘している。さらに妻イヴォンヌへの私信では、シカゴ大学における同僚W・F・オグバーンとの会話から「シカゴの人びとは、いまなお農民や貧しい移民に近い人が多く、大都市での生活に適応できていない」ようだとアルヴァクスは記している¹⁷。

ちなみに、1967年生まれのカナダの歴史家、ヘンリー・ユーによれば、1920年代当時のシカゴの社会学者たちは、多くが現代でいう合衆国中西部の州の小さな町の出身であった¹⁸。パーク自身は、ミネソタ州レッドウィングで豊かな自然環境を満喫した子ども時代を過ごしたとみられるが、18歳で入学したミネソタ大学における学業には苦勞したようである。W・ラウシェンブッシュが書いたパークの伝記によれば¹⁹、小学校の元教諭であり、息子の苦勞を察した母親シアドゥーシアは「そちらには『胸の悪くなるような劣等感 sickening sense of inferiority』など感じたことがない人たちもいるでしょうが

16 M. Halbwachs, « Chicago, expérience ethnique », *Annales d'histoire économique et sociale*, 4^e année, no. 13, 1932, p.11-49.

17 Ch. Topalov, « Un savant voyage. Les “lettres des États-Unis” de Maurice Halbwachs au *Progrès* de Lyon (septembre-décembre 1930) – II. », *Genèses*, no. 59, 2005, p.131-50.

18 H. Yu, *Thinking Orientals: Migration, Contact, and Exoticism in Modern America*, Oxford University Press, 2001, pp.32-33.

19 W. Raushenbush, *Robert E. Park: Biography of a Sociologist*, Duke University Press, 1979.

[...] 私たちは、みずからの欠点を目にし感じるものでなければ、それら
を乗り越えることはできないのです」と1883年1月に書き送ってい
る²⁰。

前出のユーにいわせれば、比較的小さな田舎町と、シカゴのような
大都市という対比は、「異なる世界から来たというこの感覚」を、ア
メリカ社会の理解を形づくる一対^{いつつ}のカテゴリーとして具象化したもの
である。ユーに従うなら、この対比の図式には「全ての人が、お互い
や、お互いの行状を知っている」田舎町と、「高度に個人化され、そ
こでは全員が互いに見知らぬ人である世界市民的なアリーナ」として
の大都市という、1920年代当時のシカゴの社会学者たち自身の移動
の経験から来る見方が埋め込まれているのである²¹。

「精神の不安定さ、激しい自己意識、落ち着きのなさ、はけ口のな
い不快感」といった、心理面で否定的といえるマージナル・マンの
性格づけもまた、こうした図式との関係で、まずは位置づけられる必
要がある。社会学者パークの同僚たちは、その多くが小さな田舎町に
ある故郷＝「異なる世界」をあとにし、ニューカマーの移民が多数派
を占める大都会シカゴにやってきたという感覚を共有している。この
文脈のなかに置かれるとき、マージナル・マンがもつとされる心理的
な不安定さは、異常な他者の情動というよりは、理解ないし共感でき
るものに近づいているといえることができる。例えば、パークは、次の
ように記していた。

「移民が、よく知らない国でみずからの幸運を求めるために、祖
国を離れるときに経験するのと比べられるような移行や危機の時
期が、私たちのほとんど (most of us) の生活のなかにもたいて

20 *Ibid.*, p.10.

21 Yu, *loc.cit.*

い存在していることは、疑う余地がない。」²²

こうしてマージナル・マンの否定面は、ニューカマーの移民ではない「私たち」にも身に覚えがある「移行や危機の時期」の延長線上に置かれるわけである。

5. 「言葉のあや」がもつ触発する力

とはいえ、マージナル・マンという言い回しが、科学的な概念として用いられるさいに露呈してしまう弱さを糊塗できると筆者（大中）は考えていない。パークらのマージナル・マン論を批判的に検討した A・W・グリーンが指摘するように、「因果関係の探究とは、種差による違いの探究」である²³。しかしマージナル・マンという言い回しが、この目的に役立つかは疑わしい。人種的ハイブリッドと文化的ハイブリッドの全てを含むマージナル・マンは、概念としてあまりに総括的で、集団ごとの差異化に失敗しているというグリーンの非難には、もっともなところがある。前出のゴロヴェンスキーも似た立場をとり、「これほど全てを包含し全てに広がる概念は、意味のある社会学的仮説として自己主張する資格を失う。それは、たんなる言葉のあやになりさがる」と述べている²⁴。現代の用語でいうなら、何らかの「アイデンティティ」に収斂する^{しゅうれん}ような各集団の特質を抽出することが、社会科学がなすべき実践と捉えるなら、その種の実践を行なうのに、マージナル・マンという言い回しが、適しているとは言えない。

それでは、私たちが今日、このマージナル・マンという表現について再考することは、無益な行為であろうか。筆者の考えでは、マージ

22 HM, p.893.

23 A. W. Green, "A Re-Examination of the Marginal Man Concept", *Social Forces*, vol. 26, no. 2, 1947, p.168.

24 Golovensky, *loc.cit.*

ナル・マンをめぐる先行研究を、意味のあるしかたで今日再読することは可能である。

筆者が望ましいと考える読解の方向性を示唆するために、次の事実に触れておきたい。その事実とは、マージナル・マンをめぐる先行研究を読むときに、多くの人が気づくに違いない事実、すなわちマージナル・マンという名辞のもとで、きわめて多様な題材が取り上げられてきたという事実である。

例えば、R・M・サルモンのある研究では、18世紀半ばに、現在のメキシコ北部にあたる地域で活躍した、先住民の指導者が主題として取り上げられている。サルモンによれば、当時、宣教師団とスペインの二重支配の仕組みの浸透により、この地域では伝統的な部族の権威が失われつつあった。こうした状況のもとで、ある先住民の指導者（Luis Oacpicagigua）が、スペイン文化を取り入れることをつうじ権威の空白を満たそうとしたマージナル・マンとして描きだされている²⁵。

また、M・エステリ・スミスは、アゾレス諸島の女性たちが、米国や欧州に移民をするさいに、出発前の元来の環境でみずからがマージナル化していることを逆手にとり、さまざまなネットワークの間の仲介役を務めることで、家族や関係者の状況を改善した点に着目した。このM・エステリ・スミスの研究は、マージナリティと女性の果たす役割を、マージナル・マンという言い回しを用いつつ、積極的に評価したものである²⁶。

さらに、E・H・トンプソンとA・S・ヘイドックは、乳がん罹患し、自己のマスキュリニティや手術痕のある身体に向き合うことに

25 R. M. Salmón, “A Marginal Man: Luis of Saric and the Pima Revolt of 1751”, *The Americas*, vol. 45, no. 1, 1988, pp. 61-77.

26 M. E. Smith, “The Portuguese Female Immigrant: The ‘Marginal Man’”, *The International Migration Review*, 1980, 14(1), pp. 77-92.

なった男性たちに関する分析を、やはりマージナル・マンという言い回しを手掛かりとして行なっている。トンプソンとヘイドックによれば、乳がんという疾患は女性性と結びつけて語られることが多く、男性患者は「本当の男ではない男」という意味でみずからを「マージナル・マンの地位」にあると認識する場合がある。しかし、時間の経過に伴い、みずからの体験を他の患者と共有するといった、積極的な態度への変容が、これらの男性に見られたという²⁷。

そして最後に、マージナル・マンは、複数の世代のせめぎあいのなかに置かれた存在という意味でも用いられる場合がある。例えば、20世紀前半の合衆国におけるユダヤ系大学生を分析したクルト・レヴィンは、ユダヤ人コミュニティと多数派のアメリカ社会のはざまで迷う、これらの大学生をマージナル・マンとして位置付けているが、その際、心理的な帰属先の不確かさという点で、マージナル・マンは、大人と子どもの間をさまよう「青年と同様の位置にある」とされていた²⁸。また、折原浩は、パークラに端を発するマージナル・マンをめぐる議論を整理したのち、その議論を1960年代の日本における学生を含めた「反体制闘争集団」の分析に用いている。折原によると、反体制運動のなかにも、正統派集団（OG）と対抗集団（RG）があるが、OGとRGの連帯を可能にするのは、「従来の経緯を知らない新たな世代」である。マージナル・マンを意味する「境域人」という表現を折原が用いるのは、こうした媒介的な立場を占めるはずの「従来の経緯を知らない新たな世代」の人びと、つまり若者に対してである²⁹。

エスニシティ、ジェンダー、世代のいずれについても用いることが

27 E. H. Thompson & A. S. Haydock, “Men’s Lived Experiences with Breast Cancer: The Double Consciousness of Marginal Men”, *Sex Roles*, 82, 2000, pp. 28-43.

28 K・レヴィン『社会的葛藤の解決』末永俊郎訳、東京創元社、1971年（第9版）、240-241頁。

29 折原浩、前掲書、197-199頁。

できるマージナル・マンという呼称は、確かにきわめて伸縮自在で、ゴロヴェンスキーが指摘していたように、厳密な定義を伴った概念というより、「言葉のあや」と呼ぶべきだという意見が提出されるのは理解できる。また、ジェンダーも記述の対象に含むことを考慮に入れ、「境界人層」に「マージナル・パーソン」というルビを振ることで、男性中心の記述を緩和しようと試みた、精神科医の笠原嘉^{よみし}の語法を参考にすべきかもしれない³⁰。いずれにせよ、マージナル・マンをめぐる筆者（大中）の再考の試みは、これほどまでに多様な領域からの発話を可能にする、「言葉のあや（figure of speech）」、すなわちマージナル・マンという言い回しがもつ触発する力に注目するところから出発したい。

6. 地位のジレンマ

マージナル・マンという言い回しが、多様な領域からの発話を促してきたとすれば、それはおそらく、E・ヒューズが主張するように、この言い回しが「地位のジレンマ」をめぐる記述につながりやすいからである。

ヒューズの論点は、合衆国の黒人には、「伝統的な役割」が割り振られており³¹、社会的・文化的に存在してきた役割期待のなかに含まれている「ステレオタイプ」と³²、黒人と見なされうる諸個人がもつ志望との間にギャップがあるとき、「地位のジレンマ」が発生する、という主張にある。

ヒューズは地位のジレンマをめぐる持論を説明するにあたり、合衆国の女性たちにも、伝統的な役割期待をめぐる地位のジレンマがあると指摘する。例えば、ヒューズが論文を書いた1949年当時の合衆国

30 笠原嘉『青年期』中公新書、1977年、59頁。

31 Hughes, p.61.

32 Ibid., p.60.

において、「女性と黒人のいずれの伝統的な役割にも、医師という役割は含まれていない」³³。そのため、女性や黒人が、医師のような、伝統的な役割期待にそぐわない職業に就くと、その人を医師として扱うべきか、女性や黒人として扱うべきか、という「問題」が発生していた。

この「問題」をめぐるヒューズの見通しは、女性や黒人とみなされる個々の人が諦めてしまい、ステレオタイプに沿った役割に退いてしまう、という場合から、「女性」や「黒人」がカテゴリーとして、例えば医師といった役割を演じる側に追加される場合、さらには「女性」や「黒人」というカテゴリーが拡張されたり変更されたりした結果ジレンマが減る場合など、多岐にわたる。

私たちは、ヒューズの議論の詳細に立ち入ることはできない。しかし、ここでの主題との関係では、パークもまた、マージナル・マンが、移住先など新しい社会で「完全には受け入れられていない」場合の社会の側の要因として、「人種偏見」に言及していたことは、銘記しておきたい³⁴。

7. リースマンらによる再定義

マージナル・マンという言い回しがもつ触発する力のみなもとを、ヒューズが地位のジレンマに求めたことは、マージナル・マンという言い回しが適用される人びとの範囲や、この言い回しの意味合いに関し、新たな見方を生み出した。

例えば、P・A・ジョンソンは、その評論「マージナル・マン再訪」で、「人類史はまさしくマージナル・マンの歴史として書かれうる」と高唱している³⁵。

33 *Ibid.*, p.61.

34 HM, p.892.

35 P. A. Johnson, “The Marginal Man Revisited”, *The Pacific Sociological*

ジョンソンは、「その最も広い意味」でマージナル・マンという言葉を受け止めるならば、そこには年齢の問題も含まれるという。すなわちジョンソンによれば、たいていの社会において、取るべき振舞いと、そうでない振舞いは、ある程度まで年齢により順序づけられ、階層化されている。今日用語法でいえばエイジズムにつながる問題関心であるが、マージナル・マンという言葉があてはまる範囲を、年齢にしたがって割り当てられる役割期待と、みずからの志望との間にズレを感じている諸個人にまで広げるなら、マージナル・マンという言葉の適用範囲は、確かに人類史の全体をカバーするほど広いものになるかもしれない。ただし実際には、ジョンソンは「少なくとも教育ある社会の成員」にこうした階層化への意識が見られると述べるにとどまる。

この年齢の問題に加え、ジョンソンは「19世紀から20世紀にかけての西ヨーロッパと合衆国における政治・哲学・神学・文学・芸術の歴史」のほとんどが、「マージナル・マンの出自と運命をめぐる考察」によって解明されるはずだとも述べていた。考察すべきマージナリティの範囲を年齢の問題にまで広げる一方で、地理的にはもっぱら「西ヨーロッパと合衆国」を念頭に置いており、パークらが関心を寄せていたアジアやアフリカの人種的・文化的なハイブリッドについては言及が乏しい。

こうした姿勢からも推測されたとおり、「マージナル・マン再訪」の主眼は、この評論が書かれた1960年当時の情勢に照らし、合衆国内におけるマイノリティとマージナリティの関係性に関し、新しい解釈を示すことにある。すなわち、ジョンソンによれば、マージナル・マンは、組織された少数派 — 典型的には、「全米黒人地位向上協会

Review, vol. 3, no. 2, 1960, pp. 71-74. なお本文中のジョンソンに関する情報の出所は、全てこの文章である。

(NAACP) やアメリカユダヤ人会議、女性法律家のためのポーシャ・ソサイエティ」³⁶ 等々 — と必ずしも同一視されない。それどころか、ジョンソンが注目するのは、逆に「みずからのマージナリティに対してマージナル」な「少数派のなかの少数派」だ。ここでいう「みずからのマージナリティに対してマージナル」な「少数派のなかの少数派」とは、エスニシティやジェンダーといった基準に照らし、組織された少数派の一員となりうる属性（例えば、黒人や女性）をもちながら、これらの組織を成り立たせている集団的なアイデンティティの要求にも同化の圧力を感じるような人びと、を指す。

ジョンソンは、このようにしてマージナリティの読み替えを行なうわけであるが、この読み替えのアイディアの出所は、デイヴィッド・リースマンの講演「マージナリティに関するいくつかの所見」だ。リースマンは、前者の、組織された少数派のマージナリティを「公然たる」マージナリティと命名し、後者の「少数派のなかの少数派」のマージナリティを「隠された」マージナリティと命名する。じつはこうした分類を、リースマンは前出の「地位のジレンマ」をめぐるヒューズの文章に触発されて行っているのであるが、その際リースマンは、パークの「パーソナリティと文化の葛藤」という文章から、次の一節を引用してもいた。

「他の人びとがいることでみずからに対してなされる心理的な攻撃から、みずからを守るために、人間は、もしそうすることを選ばなければ、礼儀正しさを煙幕として使ったり、自分の顔を仮面として使ったりすることができる。その仮面の裏で人間は、他人と

36 これらは、ジョンソンが参照しているリースマンのつぎの論文で挙げられている例である。D. Riesman, “Some Observations Concerning Marginality”, *Phylon*, vol. 12, no. 2, Clark Atlanta University, 1951, pp. 113-27.

自由に交際しながら、ある程度の内面の自由を保つことができるのである。人間は時に応じて、世の中からしりぞくことができる。そして人びとは、行為の独立性を維持できないときでさえ、社会的距離を維持し、みずからの思想の独立性を守る手段を、意識的にであれ無意識的にであれ、つねに工夫してきたのである」³⁷。

ジョンソンにも共通する発想であるが、リースマンは、「隠された」マージナリティを「知識人の知的性格のみなもと」として高く評価する。しかしその一方で、リースマンやジョンソンの論調の特徴として、NAACPのような組織された少数派が、マージナリティを独占することへの拒否がある。「マージナリティに関するいくつかの所見」でリースマンは、「全体主義社会」と対比しながら、アメリカらしい「ある種のルーズさや無秩序、態度の曖昧さは、善き生の一部をなすと私自身感じている」と述べている³⁸。前掲のパークの文章を参照しつつ、リースマンは、社会の統合（integration）を「疑問の余地のない理想」として掲げたり、「マージナリティを敵視」したりするような知識人や社会学者とは異なる存在として、パークを描き出していた³⁹。

8. 「人種関係サイクル」と身体的差異をめぐる意識

リースマンのこの描写は、20世紀後半以降、同化主義者の代表格として、パークが位置づけられてきただけに重要である。パークが同化主義者の代表格とされるのは、競争→紛争→適応→同化の4局面からなる、いわゆる人種関係サイクル論を主張したためであろう。しか

37 Riesman, *op.cit.*, p. 127. 日本語訳はデイヴィッド・リースマン『個人主義の再検討』上、國弘正雄・牧野宏訳、ペリかん双書、1976年、292頁を参照している。ただし訳文は一部変更した。

38 *Ibid.*, p. 126.

39 *Ibid.*, p. 125.

し、パーク自身が述べるように、「同化とは何を意味するのか、必ずしも明らかではない」⁴⁰。競争、紛争、適応、同化という4つのキーワードそのものは、パークにとって、人種間関係に限られない、より一般的な相互行為からなる自然史的かつ文明史的な過程を説明するものである⁴¹。

晩年には人間生態学^{エコロジー}を語るにいたる、パークの大きな理論的構想を跡付けることは、小稿の範囲を超える。ここでは、パークの人種関係サイクル論に関連して、2点ほどコメントを加えるにとどめたい。

まず1点目は、パークにおける、人種関係サイクルの実際の適用は、機械的かつ画一的な適用からは程遠いということである。ロニー・アセンズによれば、競争→紛争→適応→同化という4つの局面が「停止することも逸脱することもない」一連の動きであるという解釈を提示した著作のひとつに、S・M・ライマン『社会思想におけるブラック・アメリカン』がある⁴²。ライマンの解釈は、パークを論じた後の論者にもひきつがれており、影響力が大きかったと考えられる。しかし、評論「太平洋上におけるわが人種的^{のち}国境」(1926年)では、いわゆる排日移民法(1924年)により日系移民が停止された事実をパークも直視しており、「同化や人種間の混淆に向かう傾向があるからといっ

40 R. E. Park, “Racial Assimilation in Secondary Groups with Particular Reference to the Negro”, *American Journal of Sociology*, 19, no. 5, Mar., 1914, p. 606. パークとバージェス『科学としての社会学入門』に同化の定義がある (Cf. R. E. Park & E. W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*, The University of Chicago Press, 1921, p.735. 以下この著作は *Introduction* と略記する)。

41 厚東洋輔『〈社会的なもの〉の歴史』東京大学出版会、2020年、156頁と215頁、において指摘されているとおり、『科学としての社会学入門』には、動植物や昆虫の生態に関する資料文献も収録されている。

42 L. Athens, “Park’s Theory of Conflict and His Fall from Grace in Sociology”, *Cultural Studies ↔ Critical Methodologies*, 2013, vol.13(2), p.76.

て、そうした傾向が抵抗を受けることはない、あるいは — 場合によっては — 禁止されることがないとはいえない」と述べている⁴³。そして「ハワイにおける人種関係サイクル」（1937年）で、パークは「文明」が「実験室のような条件のもとで」進展しつつあったハワイについて論じている。当時のハワイは、男性移民の比率が高く、人種間の通婚への抵抗感も比較的薄かったため、パークの視点からは成功例とみなしえた。しかし、そのハワイについても、パークは人種関係サイクルを機械的に適用することはしていない。むしろ、パークは、人口が増えた結果、砂糖やパイナップル農場の労働力不足が解消されてしまったため、今後も、移民導入や、人種間の混淆、文化的同化に向かう傾向が続くかは未知数と記しており、慎重な態度を崩していない⁴⁴。

つづく2点目は、パークが同化をいうとき、「共通の言語」⁴⁵の必要性や「文化の融合」⁴⁶のような、言語や文化の面をもっぱら問題にしているということである。確かにパークは、生物学的な意味における人種間の混淆（amalgamation）について語り、人種間の混淆が同化を促進すると主張している⁴⁷。またパークは、人種間の混淆や文化的な同化が「全ての場合について同じ容易さや同じ速さで進むわけではない」と見通したうえで⁴⁸、いわゆる人種問題は、同化や混淆がまったく起こらない、あるいは、きわめてゆっくりとしか進まない状況から発生する、とも記している⁴⁹。ただし、パークは、「ゴビノーの理論」、すなわち文化を「本質的に人種的な特性」と定義づけたうえで、ある人種には「高等な文化」が創りだせるが、他の人種はできないとする

43 R&C, p.151.

44 R&C, pp.192-195.

45 Introduction, p.763.

46 *Ibid.*, p.737.

47 *Ibid.*

48 HM, p.890.

49 *Ibid.*

ような生物学的決定論、に賛成しているわけではない⁵⁰。この種の生物学的決定論は、ジャン＝ミシェル・シャプリが指摘するように、文化人類学者のボアズらによる批判が既になされていたにもかかわらず、パークが活躍した時代の社会科学的な言説において依然として広く見られた発想であった。パークは、こうした同時代の知的状況のなかで、「生物学上の出自に由来する人種間の不平等性という観念」をしりぞけ、人種という用語じたい、生物学の用語で定義するのではなく、「社会的な定義」を行なおうとしたと、シャプリは解釈している⁵¹。ストーンキストの著書に寄せた序文「文化的コンフリクトとマージナル・マン」のなかで、パークは次のように述べていた。

「いわゆるマージナル・マンに関するこの〔ストーンキストの〕研究がよってたつ根本的な考えは、私にいわせれば、個人のパーソナリティ人格は、本能や気質やホルモンバランスによってたつものであるにしても、人格の最終的な形態は、個人がみずからについて抱く考え方の影響のもとに完成される、という信念だ。ひとりひとりの個人が、みずからについて不可避免的に形づくる考え方は、特定の社会のなかで個人に対し運命が割り当てる役割によって、かつ、この社会にいる人びとが、この個人に関し形づくる意見や態度をもとに、決定されるのである — 要は、個人が、みずからについて形づくる考え方は、その個人の社会的な地位に依存するのだ。この意味において、個人が自分自身についていなく考え方は、個人の産物ではなく、社会の産物である」⁵²。

50 Introduction, p.769.

51 Jean-Michel Chapoulie, « Robert F. Park, la tradition de Chicago et l'étude des relations entre les races », *Sociétés contemporaines*, no.33-34, 1999, p. 140-144.

52 R&C, p.375.

前出のユーによれば、パークに代表されるシカゴ学派の論者の多くが、生物学的決定論に反対し、人種意識を文化として研究する視点を打ち出した。違う言い方をするならば、これらの論者は、身体そのものを研究することで人種間の差異を説明するのではなく、身体的差異を意味づける、個人や集団の意識を研究する必要性を説いたのである。そして、ユーに従うなら、これらの論者の信念は、アメリカの社会思想を深くしるしづけた。例えば、パークが活躍した時代よりも後になって「アイデンティティ」と呼ばれることになる、個人や集団の「自己」をめぐる意識の諸形態への関心は、この信念から創りだされた、というのである⁵³。

9. パークにおける「アメリカ化」と日系人

マージナル・マン論を再考する私たちの試みを終える前に、1世紀ほど前の取り組みを現代の感覚で判断する時代錯誤をできるだけ避けつつ、この試みが含む意味合いを改めて示すためにも、パークが推奨しうると考えていた同化（「アメリカ化」）政策と、日本人（日系移民）の関係について少し見ておきたい。

パークとバージェスは、『科学としての社会学入門』第11章において、ヨーロッパ諸国において失敗した強制的な国民文化のはく奪とは対照的な⁵⁴、人びとの「アメリカ化」について語っている。パークとバージェスにとっては、同化の前の段階にあたる適応が急速な変化という形をとりうるのに対し、同化は、少しずつ進む無意識的な成長の結果であった⁵⁵。パークとバージェスは、移民や外国人がもつ古い記憶を意図的に消そうとする政策には否定的であり、むしろ間接的に、移民や外国人がすでにもっている生活経験を活かしながら、参加の機会を提供す

53 Yu, *op.cit.*, pp.45-46.

54 Introduction, pp.739-740.

55 *Ibid.*, p.736.

るやり方を採ってこそ、同化が実態として進むと考えていた⁵⁶。

パークとバージェスに関し、望ましい同化としての「アメリカ化」政策は、以上のように要約できる。しかし、仮にこうした理想化された記述をパーク自身の視点に沿って受け入れたとしても、「アメリカ化」をめぐり、パーク自身も認める重要な例外が、少なくとも2つ存在している。

1つめの例外は、アフリカ系アメリカ人である。パークの表現を引用するならば、「1619年に最初に合衆国に輸入された」アフリカ系アメリカ人は、奴隷という地位に長らくあった。南北戦争直前の1860年には、もはや外国人とはいえなくなったが「もちろん市民ではなかった」。そのため、アフリカ系アメリカ人に関しては、奴隷主の家庭やプランテーションの労働環境において「同化されたというより馴致された（domesticated）というほうが正確かもしれない」とパークは述べている⁵⁷。

2つめの例外は、日本人（日系移民）である。パークにとって、日本人は「組織され、精神的な力のある国民」だ⁵⁸。そのため、ヨーロッパ人ほど容易に日本人がアメリカ社会に溶け込めていないとしても、それは日本人の精神的な能力が原因ではない。では、何が原因で、アメリカ西海岸を中心に、日本人（日系移民）をめぐる人種問題が発生していたのか。パークはその原因を、前述の身体的差異をめぐる個人や集団の意識に求めている。

「日本人は、その容貌において、人種的な烙印を押されている。

日本人は、いわば、日本人を分類してしまう人種的な制服を身にまとっているようなものだ。日本人は、例えばアイルランド人が

56 *Ibid.*, pp.739-740

57 R&C, p.211.

58 *Ibid.*

そうであるようには、そしてまた、他の人種の移民により低い程度であてはまるようには、住民のなかの無国籍的な大衆に、区別のつかない形で〔混ざり込み〕、単なる個人になることができない。黒人と同じように、日本人は、我々のもとで、ひとつの抽象、ひとつのシンボルとして留まり続けることになってしまっている — みずからの人種というだけでなく、東洋と、曖昧で定義もはっきりしない、時に我々が『黄禍』と呼ぶ脅威のシンボルとして」⁵⁹。

アメリカ社会において、「黒人と同じように」下層に位置づけられ、生身の人間としてではなく、「ひとつの抽象、ひとつのシンボル」として日本人が見られているという問題意識が、パークにはある。この問題意識をめぐり、パークが書いたもっとも鮮やかな文章のひとつが、「仮面の背後にあるもの」(1926年)だ⁶⁰。この文章でパークは、合衆国で生まれ、アメリカのとある大学町に住む、アメリカ人家庭で育てられた若い日本人女性とのやりとりを紹介している。この女性と出会ったとき、パークは、東洋人的なメンタリティや英語の訛り^{なま}がそのうち姿をあらわすと、知らず知らずのうちに思っていたという。しかし、この女性のどんなにささいな表現からも、東洋人に特有の訛りやメンタリティを、パークは感じ取ることができなかった。それはあたかも、東洋人の仮面をつけた、アメリカ人女性と会話しているような感覚だったと、パークは告白している。

両者の出会いの2～3か月後、この女性は、「最初で最後となるだろう」日本への旅を終えていた。なぜこの旅が「最初で最後となる」と考えられたかといえは、それは次のような事情による。すなわち、この女性は、

59 HM, pp. 890-891.

60 R. E. Park, “Behind Our Masks” in R&C, pp. 244-255. 日本語訳については、町村敬志・好井裕明編訳『実験室としての都市 パーク社会学論文選』御茶の水書房、1986年、38-61頁、を参照した。

当初、自身にとって未知の祖国である日本に長く滞在したいと願っていた。にもかかわらず、実際に日本を訪問してみると、言葉や服装を含めた全てが、この女性がアメリカ生まれアメリカ育ちであることを示しており、その容貌が薄気味悪い印象を日本の人びとに与えた。彼女が通りに姿を現すと、人びとがぞろぞろと後をついてきたほどである。このことに加えて、日本人に土地の所有等を禁じたカリフォルニア州外国人土地法が通過したばかりの時期であった。そのため、当時の日本の人びとは、日本人でありながら、あたかもアメリカ人の仮面をつけているかのような女性の姿に憤りをおぼえたのだ — この「仮面の背後にあるもの」に登場する若い女性は、まさに「二つの世界に属しており、どちらの世界でも異邦人」という定義どおりのマージナル・パーソンとして描き出されている。

このエピソードを通じて、パークがアメリカ人の読者に伝えようとするのは「アメリカで生まれ、アメリカの西洋式の学校で教育を受けた東洋人は、たとえ人種的には東洋人であっても、文化的には西洋人である」というメッセージだ。その事例として、パークは、多くがキリスト教に入信し、周囲のアメリカ人社会に比較的良く受け入れられていた、カリフォルニア州リヴィングストンの日本人入植者の子どもたちに言及している。パークによれば、リヴィングストンのこの子どもたちは、「アメリカ人になるように成長している」。そして「アメリカ人として彼らは、自分たちが暮らしている社会で現在一般に認められている日本人や全ての東洋人に対する評価を [...] 受け入れようとするだろう」と予想している。だが、不幸なことに、ここでパークが念頭に置いている、日本人や東アジア人に対する一般的な評価とは、その容貌が、人種的な烙印として機能してしまい、ひとりひとりの人格は無視されるような、差別的評価である。そのため、これらの子どもたちには、「私たちの大半にしばしば襲いかかるあの『胸の悪くなるような劣等感 sickening sense of inferiority』を完全には克服できない瞬間がやってくる」はずだとパー

クは述べる。すなわち、「他の人種的マイノリティの人びとが時に口にする言葉、『わたしは自分の人種が嫌い！わたしはわたしなんて嫌い！』という自己嫌悪の形で、これらの子どもたちのマージナリティが表現されることになりかねない、というのである⁶¹。

前出のラウシェンブッシュによれば、「仮面の背後にあるもの」を書いた頃のパークの問題意識は「白人たちに、人間としての東洋人に興味をもたせること」にあった⁶²。パークには、読者と同じ人間性をもった子どもや若者が、多数派社会の側がもつ、身体的差異に関する歪んだ意識を、みずから内面化させ苦しむ姿を示すことで、良心的な人びとに訴えかけようとする狙いがあったのかもしれない。

その一方で、ストーンキストが警告していたように、それほどマージナルでない人が「マージナリティをドラマ化し、センチメンタルにし、道徳化する」のは、当事者にとって望ましくない結果をもたらす可能性がある⁶³。「仮面の背後にあるもの」では、マージナル・マンに自己嫌悪が結びつけられているが、既に検討したように、両者の関連づけには調査の偏りが指摘されていた。

全ての日系人が、パークらが言う意味において、マージナルだったわけではないという事実も、確認しておくべきであろう。例えば、第2次世界大戦中に合衆国政府により強制収容された日系人を研究したジェイムズ・M・サコダによれば、収容所にいた人びとは「家族と暮らす移民1世」「独身男性の移民1世」「教育のために日本に送られたが、大不況に伴い帰米した2世」「アメリカ市民ではあるが日本語が流ちょうで仏教徒、白人を避ける日本びいきの2世」「キリスト教に入信しており、

61 R&C, p.249.

62 Raushenbush, *op.cit.*, p.114.

63 E.V. Stonequist, "The Marginal Man" in E. W. Burgess & D. J. Bogue, *Contributions to Urban Sociology*, The University of Chicago Press, 1964, p.344.

アメリカナイズされているが、収容所に入れられる前は、庭師かフルーツスタンドで働くぐらいしか職業上の見通しがなかった2世」「スポーツ好きで教会は嫌いな、暴れ者の2世」「日系人集団の閉鎖性を好まず、むしろ白人と働く機会を得て、その集団から脱出することを望むマージナル・マンの2世」のように分類される。サコダによれば、同じ日系人でも、独身男性の移民1世や婦米組は日本の勝利を信じる傾向が強かったが、マージナル・マンの2世たちは、合衆国に対する忠誠心が堅かったという⁶⁴。

10. おわりに ― 言説戦略としてのマージナル・マン論―

「マージナル・マンとは誰か」を定義することは難しい。2つ以上の文化があり、1つが強く支配的な文化で、もう1つが弱く同化されかねない側の文化だったときに、弱い側の文化にあって、自文化ではなく、教育などの結果、支配的な異文化の側を志向している人が、その同化志向ゆえに支配的な文化に引き寄せられながらも、支配的な文化の担い手の側からの差別により同化したと承認されないことで、弱い側の自文化に戻る、という不安定性をもつのがマージナル・マンである。一方、この不安定さを利用し、心理面からマージナル・マンを定義できるかといえ、自己嫌悪のような特徴による定義は、少数派の現状を正しく反映していない可能性があり、そうした定義も簡単には採用できない。その結果、マージナル・マンが形成される主要因とされた文化間の摩擦でもなく、心理的な不安定さをめぐる生物学的な決定論でもなく、地位のジレンマの有無をつうじて、マージナル・マンは再定義されることになった。しかしこの再定義によっても、結局のところ、誰がマージナル・マンか確定することは難しく、社会科学の概念としては弱い。

64 J. M. Sakoda, "The 'Residue': the Unresettled Minidokans, 1943-1945", in Y. Ichioka(ed.), *Views from within*, UCLA, 1989, pp.247-284.

にもかかわらず、この概念としての弱みが、言説戦略としては強みになっている、と主張するのが小稿の眼目であった。すなわち、異文化との境目に立っている、半ば他者のような存在を指しているかに見えたマージナル・マンは、実際にはかなり伸縮自在な呼称であり、「青年」などもマージナル・マンであるとされていた。マージナル・マンという言葉は、地位のジレンマの普遍性ゆえに、ほぼ全ての人の不安定性や曖昧さを指すことができた。そして実際に、パークが遺したマージナル・マンという「言葉のあや」は、きわめて多様なエスニシティ、ジェンダー、世代に関する発話を触発していた。誰がマージナル・マンか確定することが難しいということは、裏を返せば、誰もが何らかのマージナリティを秘めている可能性を示唆している。